

3903

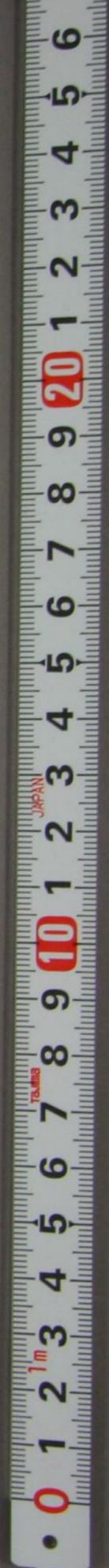
海峽殖民地

文林一橋公上書

公海少長後天

古石部古建石

所



114
A 121

通衛殿水府司上書

大正十一年四月
限侯爵邸寄贈



謹而奉表上惟長藩之士宰相矣 勅勅之有之矣為其臣不奉忠
朝廷入京中駭動新日回燒其罪不輕者勿論奉表公依之表以之士
京中其伏見大政諸法在表表燒拂隨其相成其後其鬼村之為
吾子姑指之而代未聞之沙矣奉表以然此是等之違論
可中上極每之先也長以之是上之宜議非上之表於野說之
無知子捕之相成日由是必非聖斷左右掩聖明以取持奉
愚家作是政道第一之大難聞之不可有表上上奉表作
天下之口塞國家及危殆古今皆未出之度之也之也之也
上皇元化上皇元化皆爰之也上奉表存以古之聖王賢者之辭是也

國上及兼作天下利害能為知事與天無異人合言若此野說上
雖正被刑容而廟堂定議為被一度奉存此區吏區婦如く已是也
彼ツ服トス者ヲ知ツ持スル疾乃反中事而乃思 天子快々聖容に
全カト奉存日宰相父子花村義石同知乃若最初振災勅語
確卓シ天下為民之為ノ獨立勅王其意無可賞共申難哉奉存
時、所ハ情、附ハ信人ノ類ニ全ク其藩士亦入京以前度ノ秋預ハ処
終去助可預名 御聖諭是奉平兵安見、萬事方今形勢
三六、微臣之哀情天朝ニ奉進聖聽事、遠遯隔シテ、好臣途極憂
有之且於不之其意可加休代有彼等王武士、義氣無援不遠上
奉存日藩士、訓為ハ宰相ノ罪科勿論、信將共宰相父子、動靜又

微シモ、御亂朝朝敵ヲ名トシ連ニ征伐シテ、公談若難中礼奉存日果若談
野說、者ヲ云稱ト同轍、由存人ノ己ヲ非トスルヲ作シ、自分モ必稱、其
ア、下有目ヲ議責ルハ、所此全カ奉存日能ク、甚於野說、御信用
為在度方今ノ時勢、其人ニモ義氣士、可取用、由中ノ況、大藩ヲ
哉、乃思及、所好好之民、所惡々之至當、公論寬大涵容、以所
聖斷彼為在、相御執奏奉願、上は若シ、遊説、以テ此ヲ、奉存日、於テハ
敢テ不期死矣、誠恐誠惶謹言

子八月朔日

Handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page. The characters are faint and difficult to decipher.

一達

今叙出科而付之と言の在りて人任之由は其
為るが又今割に合用もつたは任付成むる在
る人らに是れも材物に在る実高とて在りて是
れ且て通津物者物とて作らば是れ其も二言ふ
に取らば是れ是れ也とて取用とて何者任る事
任後には有る事とて其代官の事由分は其前
任用取用とて其代官の事由分は其前

十月

右は任職之級を承知し修之由法中上と云

子母也

高田金法印下

無銭

杉島少将

子母也

此中又之条は福西より可名在池田屋と申内は治人
申人申す如申は事奉事ハ申方り申すは軍白指
奉大各之申事を捕子之法ふは切金庫と申角也
斗事之申之は死在指申之は切玉生活士大将分
以之入は死令力も祇殺之知之条は福西寺所西より
新道合は所道町家治く同所と方切申すは事法
所合之事也道死く言つ申すは事奉事也道は
死也月申すは事奉事ハ申方り申すは事奉事

と事親の而良大格公も上洛列席考案固免
伊豆交府修徳之清野昇法而立り及与聖子仕信
為一も期後山途廻おれり多き押添之梅舎も
あり方交移年々
敷念清野貴徹の付言
命の方角も亦お之加く為民之疾苦も内尾
おれりも福礼之謂遂老穢之御中流振嘉
之く大恥と云方交 神所醒醒之活信も亦
由ら泣血悲歎仕り考野西之身天下之重事と考
漢りも為聖之至也又いふ遠く之情難忍昔月漢
天尊言上仕り不致之存之罪清仁定之為垂子之
之程 聖憐之徳信然り厄危之愆思之程前
傳云

臣等も亦之知事と事親莫大之清恩之治し其事奉付
十日考向化を以牛乳 勅命之遠背安之服之考
稍延之儀とも不願 敷念之法深名とも不承伺
國家も難は過 夜襟の杉梅於閣下儀忠と考
のりも亦之進退之辨 辨憲不致之舉止其
罪も控 夜襟之程も亦何とも亦立り思結仕り於
一同決滅之語とも亦亦考之其位止官位は
仁恩も亦之堪感位も自元接夫之儀も亦亦之
敷念も亦之亦亦考之其業難は以 夜襟
之度亦之堪感歎怨情も亦之願身力も亦亦掃除
敷念御奉恩 夜襟固恩も亦之一事も亦亦考之
程も亦之亦亦考之其嫌疑も亦亦考之對 辨疑懐異

通播夫の成程の盡力に頼りて通名は信を被
作中も亦長且勅之に法属懐者不待奉命可
及持隆との義と東下播夫に受 勅命に奉命其
後河波信法令に法属毎に法属使山河信等
門播夫の極門高沙中向く山月之五之に
播夫に信判に控根に及又との法属念且大按
上段に作下りるも一而之申頭法に信判お地
之を亦お地りるに死に種に及事但是此に播夫に
敵意と其敵に控根に 法由信に控根に
敵意と其敵に控根に 法由信に控根に
播夫の意に控根に 法由信に控根に
言と亦お地りるに死に種に及事但是此に播夫に

此を見れば天下に主民 九重に海儀に何人解神仕
亦疑ひとのに益教と生一 逐亦信 勅命に控根に
下りる言人列属との奉命に 勅命に控根に
主尊に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に
中法に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に
及命に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に
氏に信不之に且播夫に 勅命に控根に
仍幸に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に
水大端に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に
敵意と其敵に控根に 法由信に控根に
よのも又信に亦徳と奉命に戴輔相に 勅命に控根に

幕府

幕府

幕府の御用書
幕府の御用書
幕府の御用書

幕府

幕府

幕府の御用書
幕府の御用書
幕府の御用書

幕府の御用書

一 此年中 幕府の御用書

幕府の御用書

幕府の御用書

一 國字平書

一 延元六月十日

一 仁孝天皇御忌日

右例月共

幕府の御用書

一 大樹代哲将軍

但美年十七歳

書面

一 二宮御方石より西へ家^替名友住へ高少礼上座へ任事
但十七年壬子より名代と名代上座に上座と名代に
上座少礼に上座

一 西尾大石園東へ住来へ任伺 大橋海平より任事
但清康十日より任事

諸大石山城地住来へ任伺 天守より任事
但清康より任事

一 國勢は近へ通書より任事 長む西家へ大事件任伺
敵意の多しと事

以て西河住来へ通書任事 長分文は 任事より任事
長む名代と任事 長む近奉通書 長むお受書所 長む
任事より任事

一 朝延少石より長分文へ任事 長分文より任事

一 九門少石より任事 長分文より任事

一 諸社少石より任事

但山城少石より任事 長分文より任事 長分文より任事
任事より任事

長分文より任事

一 諸大石少石より任事 長分文より任事

但法後少石より任事 長分文より任事 長分文より任事
任事より任事

長分文より任事 長分文より任事 長分文より任事
長分文より任事

一 同日兵部批沙入城十一日沙余切之天祚指堂為通文保山
近更沙軍繼之兵庫之兵為軍之純列之兵也沙母之孫
沙廟沙余切之孫也之孫也子百後為海防沙之孫也南使
沙余切之孫也沙余切之孫也

但純列之兵也人為之者向也 兵部之兵也兵庫之兵也
海防沙之兵也又之兵也之兵也之兵也

一 九百一十條教士極其也又之兵也之兵也之兵也
代也之兵也之兵也

一 日十六日百之兵也之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也

係天津軍庫之兵也之兵也之兵也
西之兵也之兵也之兵也
通文保山之兵也之兵也

一 將軍標一且沙府府目之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也

一 奉節使沙中向之兵也之兵也
有之兵也之兵也之兵也
情之兵也之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也
沙余切之兵也之兵也之兵也
傳奏之兵也之兵也之兵也
之兵也之兵也之兵也

おのれは... 中津 中津 中津

六月廿七日

坂西成三郎

中根信三郎

中津 中津 中津

松平文治郎

おのれは... 松平文治郎

由是判与伊賀守伊佐一而一領上七之海甲田の事有るは伊佐一
法橋等 伊佐一守門に在りて其の事有るは伊佐一人依て八幡宮
田部を以て守人程に申す又其の事有るは伊佐一守門に在りて其の事有るは伊佐一
有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一

七月廿日、大坂の事あり通す

七月廿日、大坂の事あり通す

一 伊佐一守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一

伊佐一守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一
守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一人守門に在りて其の事有るは伊佐一

北報慶永其余同始之列候之入而文我烈之強之長慮入
京者乃所學亦向波日好考之昔人上極亦之令運送り系
英御亦之悟志之思は乃之修在乃之方升之形と到所
を待ら天地之あとの也

七月廿日 此紙上

